

聞名仏教

第93号
(発行日)

2018年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

健全なるいのちにあう

およそ二千五百年ほど前に、インドにお生まれになられた

釈尊(釈迦)が三十五歳の時に

覺りを完成されてブツダ(仏)になられ、八十歳でク

シナーラの林の中でおなくなり(涅槃)しました。覺られて

後、涅槃に入られるまで各地で説法されたお話がもとにな

つて、たくさんの経典が生まれました。浄土真宗のよりどころ

となる仏説無量寿経はその中の一つです。その他阿含

経や般若心経や法華経などのお経もあります。そのような

経典群のなかに、釈尊の最後の旅になったのですが、イン

ド・マガタ国の都(王舎城)を出られてクシナーラで涅槃

に入られるまでの間をテーマとした「大パリニツバーナ経」という

経典があります。この経典の中に釈尊がお弟子のアーナンダ(阿難)に語

られた次のお言葉があります。「アーナンダよ。わたしはもう

古い朽ち、よわい 齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齡に達した。我が齡は八十

となった。譬え古ぼけた車が革紐かわひもの助けによってやっ

と動いて行くように、恐らく私の身体も革紐の助けによつて

もっているのだ。しかし、向上につとめた人が一切の相をこころにとどめ

ることなく一部の感受を滅ぼしたことによつて、相の無い

心の統一に入つてとどまるとき、そのとき、かれの身体は

健全なのである。それ故に、この世で自らを島とし、自らをたよりとして、

他人をたよりとせず、法を島として、法をよりどころとして、他のものをよりどころと

せずにあれ。」(中村元訳「ブツダ最後の旅」より)

この言葉の中に不思議な言葉があります。それは「その

とき、かれの身体は健全なのである」という言葉です。

釈尊は八十歳という老齡になり、古くなってガタガタになった車を革紐で結び付けて

やっとな動いているような、そういう老化した身体となった

と言われています。八十歳もなれば、さもありなんと思

います。現代でも同じでしょう。釈尊は家無き修行僧であつて、

一処不住の旅から旅のお方です。そんな中で、身体が弱

れ、病を得てクシナーラの林の中で行き倒れのようになつ

て涅槃に入られました。こうした老いさらばえた身体にもかかわ

らず、「かれの身体は健全なのである」といわれる。それはなぜでしょうか。

いわゆる肉体的な身体はもはや老衰の極みに達しています。ですから「健全な身体」とは

物質的肉体的な意味での身体ではないでしょう。

この「かれの身体」とは、小さな肉体的な自分を超えている

というところで(かれ(彼)とい、彼の身体とはその肉

体的な身体に働いている「量りなきいのち」としての身でありま

しょう。一本の野に咲く花を見てイ

* 法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

《 盂蘭盆会法要 》

八月十日 (金)

午後二時始まり

* * * * *

エスは「栄華を極めたソロモン(王)でさえ、この花の一つほどにも着飾っていない」といつていますし、芭蕉が旅

の途中に小さなペンペン草を見て「ふとみれば ならずは

ななく 垣根かな」と詠っています。垣根かな、ともに小さな草花

にも貫き輝いている大いなる不可思議ないのちの用きを

実感しています。この大いなるいのちの用きは、釈尊だけ

なく私たち一人一人に貫き通つて働いているいのちであり

ましょう。そういう量りなきいのちを

覚醒している釈尊は、老體において働いているいのちをこ

そ真の自己であると覺つておられるのでありま

しょう。そして、このいのちは私

たちの妄念や分別では知られず、

さまざまな想念や分別を超越して知られるものでありま

しょう。そこを「人が一切の相をこころにとどめることなく

一

部の感受を滅ぼしたことによ
つて、相の無い心の統一に入
つてとどまるとき」に感知さ
れるものであると、ここでは
説かれていると伺います。い
わゆる禅定において感知され
る量りないのちです。

この量りないのちの自己
に気づくとき、もはや老いず、
病いとならず、死なないの
ちとしての自己を知るのであ
りましょう。これが仏教の要
点であります。

この自己をこそ、「自らを島
とし、自らをたよりとし」な
さいと言われ、それ以外の
くちゆく肉体とか財産とか親
族など、そういう有限的で無
常な「他のものをよりどころ
とせずにあれ」と教えておら
れるのであります。

ではそのような量りなき
のちの自己はどこで知れるの
でしょうか。そういう自己は
色や形として見えませんから
「無相の自己」ともいわれま
す。この無相の自己に目覚め
ようとして坐禅に励む禅宗の
教えもあります。これは誰
でもが為しえる行ではありません。
せん。

ところが有難いことに、私
の方からは知ることがとても
不可能な量りなきのちその

ものが、大悲のお心をもつて
私たちに用いて下さり、ご自
身を南無阿弥陀仏の言葉とな
つて私たちに現れたまい喚び
かけて下さるのでした。その
ことを教えて下さったのが釈
尊であり、七高僧であり、親
鸞聖人であります。

釈尊は仏説無量寿経に量り
なきのちであり大悲の光で
あるアミダ仏が（南無阿弥陀
仏）の御名となり、お念仏の
声となつて喚びかけ、私たち
の救いを告げ知らせ下さつて
いることを説き示して下さい
ました。無量寿経にはそのこ
とを、

「我、仏道を成るに至りて、
名、声十方に超えん。究竟し
て聞ゆるところなくは、誓う、
正覚を成らじ。」

という法蔵菩薩（阿弥陀仏の
前身）の誓いとして説かれて
います。名声とは南無阿弥陀
仏の名となり声（念佛の声）
となつて下さつて私たちに聞
かせて下さるのです。

それはどこで聞かされるか
というと、「汝、南無阿弥陀仏
と念仏申すべし」と、善き人
（善知識）から勧められてお
念仏申すようになるというご
縁を通して、私たちはお念仏
を申し、そこにおいて聞かし
められるのであります。

我が口のお念仏となつて称
えしめられ、南無阿弥陀仏と
耳に聞かせて下さるのです。
その御名は「我は汝のいのち
の親なり、汝を助ける」と喚
びかけて下さつているのでし
た。そのお念仏を聞く。聞き
受けるばかりで、量りなき
のちの親とであうのでありま
す。

そうしますと、本当にほの
かですけど、「ああ、量りなき
いのちの仏様が私の主となつ
て私とともにいて下さる。ア
ミダ仏こそ私を生かし続けて
下さっているいのちである」
ことを少しですが知らされる
のです。

肉体の姿は変わりどうしで
す。それこそ老化し、病気に
もなり、やがて動かなくなり
ます。しかし私を底から生か
して下さつていられるアミダ仏の
いのちは老いもしなければ病
いにもならず滅びもしません。
不死のいのちです。その量り
なきいのちこそ私と離れない
大悲のおまことです。それを
ほのかながらも知らせて下さ
るのであります。

釈尊が「相の無い心の統一
に入つてとどまるとき、健全
である」といわれた身とは量
りなきいのちの身（法身）で

ありますが、「相の無い心の統
一に入っている時」とは、私
たちにおいてはアミダ仏のお
声を聞く時といつていいので
あります。南無阿弥陀仏
のお念仏を聞く、その一念に
おいて不死なるアミダ仏と離
れない私であることを知らさ
れるのであります。この阿弥
陀仏と離れない自己をこそ「自
らを島とし、自らをたよりと

して、他人をたよりとせず、
法（南無阿弥陀仏）を島とし
て、法をよりどころとして、
他のものをよりどころとせず
にあれ。」
と釈尊は私たちに遺言される
のであります。

（了）

尊者阿難座よりたち

（和讃問答）

尊者阿難座よりたち

世尊の威光を瞻仰し

生希有心とおどろかし

未曾見とぞあやしみし

（大経和讃）

（現代語訳）阿難尊者は座席
より立ち、お釈迦様の常のお
姿とは全く異なる厳かで神々
しく尊いお姿を仰ぎ見て、何
というまれで不思議なことよ
と驚き、今までこのようなお
姿を拝見したことがない。な
ぜだろうかと怪しんだ。

*

D「このご和讃は仏説無量寿
経が説かれるきつかつた
因縁を和讃にされたものです。

それは釈尊のお弟子の阿難尊
者がある時、釈尊のお姿が今
まで見たことのないほど神々
しく輝かれたので驚いて思わ
ず座より立つて、（どうして今
日の釈尊はそれほど輝いてお
られるのですか）と質問をさ
れました。その縁で仏説無量
寿経の説法が説かれるようにな
つた、そのところをうたわ
れたご和讃です」

N「それは無量寿経のどこに
説かれていますか」
D「その時、世尊、諸根悦予

信心夜話

禿頭 誠師の「求法用心集」

「助かりたいがいらす、ならふがいらす、墮ちまいがいらす、仕上げる事がいらす、たゞ実言の仰せをあふぐばかりぢや。」

というお言葉がある。

「聞其名号」とは名号の仰せを聞くのであるが、聞くとは何を聞くのか。「助ける」の仰せを聞くのである。これが真実変わらぬアミダ仏の仰せ、いわゆる実言である。「仏語に虚妄なし」で、この真実の言葉に助けられるのである。

今「助ける」と仰せ下さる、今のお声を今のお念仏に聞くのである。

喚びかけたもうアミダ仏は、私の存在根拠となつて下さつている量りなきいのちである。それを知らずに流転し続けてきた私である。

「そのままなりで丸々助ける」「引き受ける」と仰せ下さる喚び声、実言を聞くばかりであつて、この外になにも付け足すものはないのである。必要はないのである。

宗祖のご消息に

とは

N 「今までこのように神々しく光輝いたお姿は見たことが無いと、阿難尊者はびつくりされた、ということでしょう」

D 「へあやしみし」とは

N 「阿難尊者はなぜだろうかと、奇怪に思ったほど、それほど驚いたということでしょう」

N 「それほど光輝かれたので

阿難が思わず知らず座より立たれたのですね」

D 「ええそうです」

N 「そこで、どうして今日はそのほど輝いておられるのですか、と阿難に問われたのですね」

D 「ええそうです。阿難尊者

のこの問いがきっかけとなつて阿難が説法された、それが仏説無量寿経なのです」

N 「なぜ阿難は今まで見たことがないほど輝かれたのでしょうか」

D 「愚かな私の推測ですが、それまで阿難は衆生が救われるためには、出家し、戒律を保ち、坐禅し、真理を学ぶという、いわゆる戒学・定学・慧学という三学を十分に修することによって覚りを成就することができるといふことを説いておられたのでしよう。

し姿色清浄にして光顔魏魏と

まします。尊者阿難、仏の聖旨を承けてすなわち座より起ち、偏えに右の肩を祖ぎ、長跪合掌して」とあります」

N 「諸根とは」

D 「お身体の五つの機能のこととで眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の五根のことです。根は感覚機能という意味です。」

N 「諸根とは要するに身体全体といつていいのでしょうか」

D 「ええ」

N 「諸根がへ悦予」とは

D 「身体全体がよろこびに満ちあふれている、という意味です」

N 「姿色清浄とは」

D 「お姿が非常に清らかである、ということですね」

N 「光顔魏魏」とは

D 「光輝いて厳かなであらせられる、ことでしょう」

N 「ではご和讃のへ世尊の威光を瞻仰し」とは

D 「阿難の厳かで光輝いてお姿を阿難尊者は仰ぎ見て、ということでしょう」

N 「へ生希有心とおどろかし」とは

D 「まれな尊さ、神々しさに阿難は驚き、ということでしょう」

N 「へ未曾見とぞあやしみし」

「行者のはからいをちりばかりもあるべからず候えはこそ、他力と申す事にて候え」

と申されている通りで、私たちの側には自らの救いにはチリバカリも役立てるものもなく、自分の善き行いとか心もお助けの役には立たぬのである。むしろ役立てようとするから、他力の救いがただけぬ。丸助けのお慈悲が分からぬのである。

「助けよう」と仰せ下さつているのに、こちらから「助かりたい助かりたい」と、助かりにかかつているのである。如来様は「そんなお前を」と、私を追っかけて今ここに「助ける」と喚んで下さっているのにもかかわらずである。

また「なろうがいらぬ」のである。よく聞法して、念仏して、あるいはよく考えてと、どこまでも「なりたいたい」「なろうなろう」で、なることばかりに目がいくから、すでにアミダ仏の「助ける」の大悲がかかつていることに気がつかぬ。前ばかりを見ていたのである。「今はだめである。いつかはどうかねば」と、未来を期待して前方から南無阿弥陀仏と、「そんな汝とともにいる、どうにもな

る必要はない、そのままなり
で助けさせてくれよ」とまで
仰せ下さっている阿弥陀仏の
情けに気がつかぬのである。

「仕上げる事がいらす」で、
聞法し念仏し考えて、助かる
身になって、信者になって助
かるうとしているから、アミ
ダ仏の「助ける」が届かない。
なんとかすれば仕上げること
ができる、いまだに自分を
買いかぶっているのである。
「たゞ実言の仰せをあふぐば
かりぢや。」
で、「助からぬ汝を引き受ける」
の一句、すなわち南無阿弥陀
仏を聞くばかりである。(了)

住職雑感

五月十三日(平成三十年)に岡山県
の湯郷温泉での高校の同窓会に十数年
ぶりに参加した。一時間前に到着した
時にはすでに大勢がロビーで語り合っ
ていた。卒業してから始めて会う人も
いて、名前を聞いても思い出せず、顔
を見ながら、昔の姿に記憶のフィルム
を巻き戻すのに時間がかかってようや
く思い出す人もあれば、全く分からな
いままの人もいる。もともと同期生は
五百人もいて、知らない人、話したこ
とのない人もたくさんいたので仕方の
無いことである。昔の美男美女も老齡

になると、等しく老體老醜は免れず、
その点では等しい。死ぬことも平等で
あるが、老體も平等である。その中で
もおしゃれをして来た老婦人もあれば、
飾り気のない人もいて老醜をさらして
いける自由の精神に打たれる。出席総
数は六十五名であった。身体の故障者
や遠方の者は来られないし、地元にい
る人でも来たくない人もいてそれはそ
れで自由である。出席者数は予想通り
であった。亡くなった同期生は三割に
近づいてきている。生き残っている者
も人生の出口の扉がチラホラ見え始め
ている。久しぶりに会って顔を見て「や
あ元氣か」の一言で収まるのが同窓会
で、一期一会でもう再び合うことが無
い人たちもますます多くなるが、とも
かく七十三の齡までこの世に生きてこ
れたことが不思議であって、その不思
議さを確認しての「元氣か」の一声で
ある。指定された席についての宴會が
おわり、ゆっくりにお湯につかって体を
浸す。この年になると花を見ることに
温泉でゆつたりしたいという願いが自
ずと強くなる。泊まりの部屋は六畳の
間で同じクラスだった者五人が寝た。
修学旅行並みで敷かれた布団が重なる
ほどである。夜一時まで、四方山話で
旧交を温める。敬語なしでの會話がで
きるのが同期生の特權であって上も下
もない。朝五時半に起きて朝風呂に入
る。朝食後、仏教に関心の深いAさん
と話をし、宿を去る。一晩の淡い夢
のような時を過ごして帰りのバスに乗
ったのであった。

お便り

T・S氏からの便り
(T・Sさんの所感『木村無
相師臨終法話注記』からの五
月号よりの続きです。)

* *
法信より。無相さん七十九歳。
亡くなられる4か月前のお便
りです。

メクラの子は、目アキにな
つてからでなく、メクラのま
んま目アキの如来にただ念仏
してと「手を引かれて」「生死
出離之境涯」無量光明土にま
いらせていただけるのでしょ
う。.....

人師といえども皆死んでし
まうもので、結局は「自分ひ
とり」となることであるから、
最終的には彼の土まで離れな
いお念仏様によつて不審は問
題は世間出世間ともに念仏に
聞思させていただくのが最高
最上だと思えます。詳しくは
念仏称え称え念仏そのものに
聞くべし。(無相師の便り)

☆私思う。何も信心いただい
て浄土へ行くのではない。信心
も悟りもいただけないメクラ
(盲目と表現)と弥陀に信知

されることが弥陀の信心をい
ただくことなのでしよう。人
間の思いや知恵はまことある
ことなし。ただ本願念仏のみ
が生死を超えて永遠の智慧で
あると如来より信心をたまわ
りたる善智識の言葉をただ信
じるだけです。

「弥陀の願心が我が安心」。如
来の願心をいただいた方々の
言葉を信じよ。言葉はただ人
によつてのみ通じる。
一蓮院に香樹院曰く「お前も
う、あちこち聞き歩かずにか
にいて念仏申していなされ」。
親鸞聖人いわく

「弥陀大悲の誓願を
深く信ぜん人はみな
ねてもさめてもへだてなく
なむあみだぶつとなうべし」

〈仏智疑惑〉

今さらわれわれが本願を疑
おうと逆謗闡提の本性、自性
をチラチラ頭わそうと如来法
蔵様におかれてはすでに十劫
の昔にそれらの一切をつぶさ
に見抜き切り切つての上に「念
仏往生」の誓願を建立無上殊
勝願とたてられたのであるか
ら言わば母親の乳房を赤ん坊
が嘔むようなもので、母親か
らしてみれば「やつとるやつ
とる」というようなもの「仏
智疑惑」するほど「疑いの齒」

「逆謗闡提の齒」が生えたよ
うなもので、母親は乳房を嘔
むようになった子供の成長を
喜んでいられるかもしれませ
んよ。(無相師の便り)

☆私思う。もうここまで仏智
に見通されれば何も言うこと
はありません。ただただ南無
阿弥陀仏と念仏申すしかあり
ません。我が助からぬと知れ
たところが南無阿弥陀仏の弥
陀の願心なのです。弥陀には
何も隠し事ができぬのです。
我は十劫の昔から無信人であ
り無仏法であり闡提でありそ
の強固なことでは弥陀の本願
と変わることはありません。
故に弥陀は五劫の苦しみの思
惟のもと本願念仏を悟られた
のであります。汝のその謗法
闡提のナントモならない機に、
どうにもならぬ機に汝相応の
弥陀願心の念仏の乳を飲めよ
と。

〈遠方法話予定〉

○六月十三日(午後)から十五日(午
後)。福井別院(宿泊可)。法話・座談
○七月二十七日。名古屋市。高畑開法
會館。十時より十二時半。法話・座談。
○七月三十一日。福井別院。二組の暁
天講座(午前六時)。午前十時より座談。
○九月廿八日。札幌市白石区。昭念寺
(興正派)。午前・午後